

2020年8月30日 礼拝説教要旨

詩編講解説教29 「栄光を主に帰せよ」

詩編29：1～11、Ⅱコリント4：5～6

第29編はイスラエルが約束の地カナンに定住する前に、元々先住民のカナン人が歌った歌に由来していると言われます。ここには自然に関する言葉が並びますが、カナンには自然崇拝がありました。カナン人が信じていたバアル神というのは「嵐の神」と言われます。3節以下を見ますと「主の御声」が7回繰り返されますが、いずれも雷として表現されています。雷というのは昔から人々に神的なものに対する畏怖の念を呼び覚ますものと理解されてきました。これは日本語ですが「雷」も元々「神が鳴る」と書いたとも言われます。風神、雷神など雷を神とする信仰があります。旧約の古い時代のカナン、フェニキアの人々もそのように雷に神的なものを感じておりました。しかしなぜこのような自然崇拝、異教の神を賛美する歌を真の神さまを賛美する詩編に取り入れたのでしょうか。

先日でしたが、すごい雷、嵐の日がありました。覚えていますでしょうか。あの日はどれくらい雷が落ちたのでしょうか。教会のあたりも落ちたと思います。この詩編はそういう雷の脅威を思い起こさせます。雷のとどろき、地響き（4節）。木に落ちる様子（5節）。動物たちも驚いて飛び跳ねます（6節）。場合によっては山火事を引き起こします（7節）。雌鹿もびっくりしてお産が早まるでしょう（9節）。大雨が降り洪水のようになります（10節）。そういう自然の脅威をわたしたちは体験しますし、古代人はそういう自然現象に神的なものを感じたのです。

しかし自然の脅威、畏怖だけで真の神さまを賛美する詩編に異教の歌を取り入れるのでしょうか。それに関して月本昭男先生という旧約学者が興味深い説明しています。「古代の人々にとって雷は戦慄と畏怖を呼び覚ますばかりではなかった。大地を瞬時に突き刺すような稲妻と山々を揺るがすような雷鳴は、むしろ乾季が終わり、雨が大地を潤す生命の季節の到来を告げる喜びの知らせであった・・・雷鳴や落雷になぞらえるヤハウエの顕現は、その恐るべき破壊力を示すだけではない。日本における春雷がそうであるように、それは生命の季節を予感させた」

雷が命の季節の到来を告げる。そのように雷を捉える。そうするとこの詩編第29編の世界が開けてきます。雷が命の芽生え、始まりということを考える時に、わたしたちは天地創造の出来事を思い起こします。実はこの第29編は創世記の天地創造の物語に深く関係しているという見方もあります。例えば3節には「水」「大水」とあります。創造物語において「水」というのは、あの天地創造の時の「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」（創世記1：2）を連想させます。その水は混沌の象徴です。でもそこに神さまの御声「光あれ」が響きます。そこからすべてのものが造られていきました。神さまの言葉が混沌を終わらせ、そこから命が芽生え、始まるのです。少なくとも聖書は、わたしたちの混沌、この膠着した状態を終わらせ、そこに新しい何かを始めさせるのは、ただ神さまの言葉だけだということ伝えてようとしているように思います。

わたしたちは時に人間の知恵、力で物事を動かし、解決しようとし、でもそれでは本当のところ何も始まらないし、何も終わらないのです。今の時代はまさに混沌、混迷、混乱の時代です。政治も経済も教育もまさに混迷を極めています。人間関係もますます希薄になり疑心暗鬼に支配されています。色々な情報、言葉が飛び交い、人々は振り回されています。あの創世

記のバベルの塔、バラル（混乱）があるのです。こういう混沌とした状況に終止符を打ち、何かを始める、動き出すきっかけを作るのは、まさに無から有を生み出す神さまの創造の御業、神さまの声、言葉による創造以外にありません。

そしてそのことがはっきりと示されたのが、イエス・キリストの出来事です。神さまの声、言葉は形となって現れました。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」（ヨハネ1：14）さらにそこには次の言葉が続きます。「わたしたちはその栄光を見た」と。キリストこそ神さまの栄光そのものだと言います。そしてこの栄光こそ、あの天地創造の「光あれ」なのです。すべてのものの始まりとなった根源的な光、神さまの栄光そのものであるキリストが到来し、地上の混沌を終わらせ、新しい命を始めさせてくださる。それが十字架とよみがえりの御業なのです。そこでわたしたちの罪の混沌は終わり、新しい命が始まりました。

第29編も、この根源的な光、神さまの栄光が語られます。1～2節「神の子らよ、主に帰せよ。栄光と力を主に帰せよ。御名の栄光を主に帰せよ」キリストによって新しく始められた命は、神さまに栄光を帰す命です。神さまを礼拝する命と申し上げてもよいでしょう。それは混沌ではなく、平和をもたらします。11節「主が民を祝福して平和をお与えになるように」ここを読んですぐにクリスマスの御言葉を思い起こしました。「いと高きところには栄光、神にあり、地には平和、御心に適う人にあり」（ルカ2：14）暗闇、混沌を生きる羊飼いたちを神さまの栄光が照らし、神さまの声がありました。キリストの到来がこの混沌とした時代を終わらせ、神さまの光の下に生きる命を始めさせてくださいました。今こそ、主の御声、救いの号令に耳を傾ける時なのです。